科し、又は何れかその一を科したもので、元祿の頃には追放の附加刑であつた。所謂疵付追放は卽ち是で、耳切・鼻切を科した後、尙その地に留ることを許した例は甚だ稀である。元祿以後疵付追放に當るものは、單に追放に處した。

ミミヨウイン　微妙院　加賀藩主第三代前田利常の法號。詳しくは微妙院一峰充乾大居士。

ミミヨウコウオヤワ　微妙公御夜話　一册。前田利常の談話を集め、藤田・竹田・九里・野村・野崎・脇田・福島・有澤など話者の名を載せてある。又異本御夜話が一册ある。これは他の同類の諸本と同一の事項も多く、話者に菊池・永原・吉田・不破・前田・長谷川・岸村・山脇・清水・大石諸氏等を擧げてゐる。又別に微陽兩公遺事を微妙公御夜話といふこともある。

ミミヨウコウゴジキゲン　微妙公御直言　一册。一名御直言覺書。藤田安勝著。此の書は著者が承應三年六月前田利常に仕へた以後、侯の小松城に在つて國政を行うた始末及び直談等を記錄して、その老後享保五年前田吉德に呈したものである。

ミミヨウコウゴネンピヨウ　微妙公御年表　三册。撰者不詳であるが、高德公御年表及び瑞龍公御年表と共に亦有澤貞庸であらう。但し記載は慶長十九年までしかない。

ミミヨウコウゴハツゴ　微妙公御發語　一册。一名利常卿御夜話。前田利常の談話を記したものである。話者の名は二三見えるが、詳しいと思はれる箇條もないではない。序文も跋文もなく、著者も明らかでない。

ミミヨウコウヤワロク　微妙公夜話錄　一册。一名微妙公遺事別集。享保九年山本基庸著。前田利常に仕へた諸士、或は謁見した町人の物語によつて、侯の行狀談話を記してある。

ミムラヤマ　三村山　能美郡東荒谷の部落から西南に當る山。高さ一二五九米。地質保羅系。尾添・東荒谷・深瀨三村の入會なるが故に名づける。山の南に兎多く、兎谷の名がある。

ミムロ　三室　鹿島郡北三郷之內中山郷に屬する部落。承久三年注進の能登國田數目錄に、『三室村、十五町五段』とあるものである。能登名跡志には、『福浦・吉野・間とて三ヶ所へ別れてある村也。此福浦より向ひ島の路日出ヶ島へ、小口の渡りとて半道あり。舟賃一人に三分宛也。』と記する。

ミモフイヨモン　水毛生伊余門　初名伊右衞門。石川郡野々市の人。仁俠を好み、公益を爲すを喜び、安政元年富樫氏の館址敷訪野の地四町十段歩を開墾するに私財を以てし、之を村民に頒つに價を求めず、又隣邑太平寺の開墾を助け、發蠶の法を改め、桑園を奬勵した。是を以て明治廿二年勅定の藍授褒章を賜はり、翌年六月十五日七十七歳を以て歿した。伊余門傍ら俳句を好み、清可亭可夕と號した。

ミヤ　宮　江沼郡北潟に屬する部落。延喜式神名帳に宮村岩部神社があるから、この邑名は延喜以前からの舊名である。藩政時代には極樂寺及び深田の出村であつた。

ミヤイヌ　宮犬　珠洲郡木郎郷に屬する部落。

ミヤガハ　宮川　鹿島郡能登部下領鵜ヶ谷內より流出し、同領で濁川に落合ふ。流程五〇〇米許。良川の部落で良川白山社の側を流れるから宮川といひ、又その水の質の良好なるが故に良川ともいふ。

ミヤガハキユウエモン　宮川久右衞門　初めて前田利長に仕へて三百石を領した。子孫藩に世襲する。

ミヤガハタダカズ　宮川忠和　通稱要助。金澤の人。關流の算學を石黑信由に學び、文化二年その揭げた奉額は、もと野町神明社に在つた。

ミヤギウネメアゲチマチ　宮城采女上地町　金澤の舊町名。龜尾記に、三社宮ノ後町には士家五六軒あつて、もと宮地采女上地町というたが、今は知るものがないと記する。

ミヤギナガナリ　宮城長成　通稱采女。祿千三百石、後四千五百石に至つた。元和元年大坂再役には第三隊の使番を勤め、岡山口に槍功があつた。實子なく、加藤石見の二男掃部を養うて嗣とし、加兵衞と稱せしめたが、夭折して一たび斷絕し、次いで大學に新知二百石を賜うて嗣たらしめたが之も亦夭折し、竟に斷絕した。

ミヤケコウ　三宅恒　園の長子。初め鉉吉と稱し、後當一と改めた。號は立軒。江戸に往きて文を古賀侗庵に、醫を多紀元堅に學び、刀圭を以て業としたが、晩年一目を眇するを以て之を辭め、明治二十年十月十二日六十二歳を以て歿した。恒德・雄二郎二人は恒の子である。

ミヤケナガモリ　三宅長盛　→ヌクキカゲタカ　溫井景隆。

ミヤケノ　三宅野　能美郡埴田の小字。屯倉の遺稱とする說もある。萬治元年十月十二日前田利常が小松城で薨じた後、こゝで荼毗し、今もその灰塚がある。螢の光に、目明野は昔は廣い郊野で、寶曆中瓦を燒いたこともある。安永八年頃か埴田村の十村が移住してから漸く民家の數を增し、原野は畑地となつたと記する。

ミヤケホウ　三宅邦　諱は邦、通稱又太郎、字は元興、橘園・威如齋・不知老齋の號がある。石川郡松任の人。幼にして穎敏、十三歳詩賦六百餘首を成した。後京師に出で、皆川淇園に師事し、遂に帷を垂れて諸生に敎へ、文政二年五十三歳で歿。門人私謚して文景先生というた。著す所、助語審象・鼎字譯・西遊筆贈・薄遊漫錄・考應錄・聖學綱・左傳發揮・左國雪寃・莊子辨疑・芻林情盟・橘園遺文等がある。

ミヤケマサトモ　三宅正知　通稱判太夫・平太左衞門。元祿中新番並として前田吉德の御近習に召仕はれ、寶永二年新知百五十石を受けて御大小將に列し、享保九年百石を加へ奥小將横目に進み、次第に昇進して御先弓頭に至り、寛保元年十二月五十四歳を以て歿した。

ミヤケマサナホ　三宅正直　通稱判太夫・權左衞門。寛保元年父平太左衞門正知の遺知二百五十石を襲いで組外に列し、表小將・定番御番頭を經、明和八年二百石を加へ、後定番頭に至り、天明二年二月廿七日歿した。

ミヤケムネタカ　三宅宗隆　通稱小三郎。能登藩に、小三郎は七尾畠山氏の臣で、宇出津天吞城に居り、天正中に沒落したが、位牌は同地の常稽寺に在る。又天吞ノ宮の傍に堂後